

ミヤコワスレの学名の変遷についての一考察

教育学部自然観察実習地 重岡廣男

1. はじめに

ミヤコワスレは、江戸時代から生け花などで観賞され^{1, 4, 7, 11, 24)}、現在でもなお切り花をはじめ、鉢物やガーデニングの材料として広く利用されている息の長い草花である。本植物は、植物名がミヤマヨメナ(深山嫁菜)、別名はノシユンギク(野春菊)と呼ばれ^{7, 12, 22, 28)}、ミヤコワスレとはこの植物につけられた花き名である¹⁾。本植物は、本州、四国、九州の主として山地林内に自生するキク科ミヤマヨメナ属^{1, 4, 7, 11, 24)}に分類される日本固有の宿根草で、自然条件下における開花日は5~6月頃である。

ミヤコワスレ(都忘れ)というネーミングは、いかにも優雅で哀愁を帯びた呼び名であることから、この呼称について調べてみると、一般に順徳上皇の故事に由来するとされているが、それほど単純ではなく近代的な植物学がこれを扱うようになってからも、植物名ばかりでなく学名も頻繁に変更されていることが分かった。

そこで、ここでは学名の変遷についていくつかの文献を通観し考察を試みた。

2. 学名の変遷について

植物図鑑などに記載されているミヤコワスレ(植物名ミヤマヨメナ)の学名を、年代順に考察した。

1897年(明治30年)に刊行された「増補・改正植物名彙」¹⁵⁾において、松村が初めて本植物の学名として、*Asteromoea cantoniensis* (DC.) を記載している。この学名は、中国広東省のアスター属に類似した植物を意味している。村松はどのような経緯でこうした学名を用いたのか定かでないが、いずれかの文献に掲載されたド・カンドルの示した植物とミヤマヨメナは同種であると解釈したことから、この学名が採用されたものと思われる。

その後、大正時代になると、牧野富太郎が本植物を Aster 属(シオン=紫苑属)に分類し、*Aster Savatieri* Makino と命名した^{3, 5, 10, 14, 17, 28)}。種小名の Savatieri は、フランス人の植物学者サヴァチエ(Paul Amed. e L. dovic Savatier)^{11, 13, 16, 18, 27)}の名に因むとされ、大文字で書き始められている。

サヴァチエは、1866年(慶応2年)から1876年(明治9年)にかけて、横須賀造船所の医師として働きながら植物採取を行っていたようである。

これ以後も、本植物は Aster 属として定着し、昭和39年に刊行された「原色園芸植物図鑑II」¹⁴⁾(1964年)まで続く。この間には、「原色園芸植物図譜第4巻」⁹⁾(1932年、昭和7年)で園芸品のみやこわすれ(ミヤコワスレ)が初めて現れる。ここでは、ミヤマヨメナ(*Aster Savatieri* Makino)の変種とされ、*Aster Savatieri* Makino var. *hortorum* Makino と記載されている。

本植物を Aster 属で取り扱う植物図鑑が多い中で、1953年(昭和28年)に刊行された「日本植物誌」¹¹⁾には、*Gymnaster Savatieri* Makino と記載されている。牧野が分類を修正して、属名を *Gymnaster* 属としたのを、大井が採用したのである。*Gymnaster* という属名は、ギリシア語の *Gymnos*(裸の)と Aster(シオン属)の2語からなり、Aster に似るが種子(瘦果)に冠毛がないことを意味している^{11, 21)}。すなわち種子に冠毛がないミヤマヨメナは、冠毛を有する Aster 属からここで分たれ、初めて *Gymnaster* 属として独立したのである。

しかし、この学名は直ちに採用されるに至らず、他の多くの著者はなお Aster 属を採用していたが、大井は1965年(昭和40年)に再び「改訂新版日本植物誌」¹¹⁾で *Gymnaster savatieri* (Makino) Kitam. (種小名が小文字に変更されている)として扱った。これ以後、ミヤマヨメナの学名は、*Gymnaster savatieri* (Makino) Kitam. が主流となり、Aster 属から独立させた扱いが一般化する^{6, 7, 8, 20, 21)}。

属名を *Gymnaster* とした植物図鑑類は、1978年(昭和53年)まで見られるが、1984年(昭和59年)に刊行された「決定版生物大図鑑・植物1・双子葉植物」¹⁵⁾には、*Miyamayomena savatieri* (Makino) Kitam. と記載され、北村によって属名が変更されている。これは、本属の学名の *Gymnaster* には、ほかに命名上の先取権をもつ分類群があるために変更された¹⁵⁾ ようで、分類の変更ではない。

これ以後、本植物の学名としては、*Miyamayomena savatieri* (Makino) Kitam. が定着し、現在に至っている^{8, 13)}。

3. おわりに

本植物の学名の変遷を調べた結果、現在の *Miyamayomena savatieri* (Makino) Kitam. に落ち着くまでには、幾度となく変更が繰り返されてきたことが分かった。ここに示された属名 *Miyamayomena* は、植物名であるミヤマヨメナから採用されているが、ミヤコワスレ(都忘れ)という語が学名の中に採用されれば、よりこの花にマッチした風情の感じられる学名になっていたかもしれないと思われる。

参考文献

- 1) 園芸学用語集 園芸作物名編. 園芸学会編.(1979)p.43. 養賢堂. 東京.
- 2) 深津 正. 植物和名の語源. (1994)pp.303-304. 八坂書房. 東京.
- 3) 飯沼愨齋・牧野富太郎. 増訂草木図説. 草部. 牧野富太郎再訂増補. (1913)p.1101. 成美堂. 東京.
- 4) 石田 明. 花卉園芸の辞典. 阿部定夫ら編集. (1986)pp.174-176. 朝倉書店. 東京.
- 5) 石井勇義. 原色園藝植物図譜. 第4巻. (1932)pp.796-787. 誠文堂. 東京.
- 6) 北村四郎・村田 源・堀 勝. 原色日本植物図鑑(上). (1969)pp.85-86. 保育社. 大阪.
- 7) 北村四郎. 朝日百科世界の植物 I. 北村四郎監修. (1978)pp.65-66. 朝日新聞社. 東京.
- 8) 北村四郎・村田 源・堀 勝. 原色日本植物図鑑. 草本編 I. (1990)p.85. 保育社. 大阪.
- 9) 北村四郎. 日本の野生植物. 佐竹義輔ら監修. (1996)p.190. 平凡社. 東京.
- 10) 牧野富太郎. 牧野日本植物図鑑. (1940)p.72. 北隆館. 東京.
- 11) 松川時晴. 新花卉. (1983)117:54-64.
- 12) 松川時晴. 朝日園芸百科. 塚本洋太郎監修. (1984)p.314. 朝日新聞社. 東京.
- 13) 松川時晴. 園芸植物大事典2. 塚本洋太郎監修. (1994)pp.2376-2377. 小学館. 東京.
- 14) 村越三千男. 原色植物大図鑑 I. 牧野富太郎(補筆改訂). (1955)p.11. 誠文堂新光社. 東京.
- 15) 村松任三. 増補改正植物名彙. (1897)p.41. 丸善(株). 東京.
- 16) 小笠原 亮. 江戸の園芸. (1999). 平成のガーデニング. 小学館. 東京.
- 17) 奥山春季. 原色野外植物図譜. 第2巻. (1960)p.62. 誠文堂新光社. 東京.
- 18) 大場秀章. 江戸の植物学. (1998). 財団法人東京大学出版会. 東京.
- 19) 大井次三郎. 日本植物誌. (1953)pp.1150-1151. 至文堂. 東京.
- 20) 大井次三郎. 改訂新版日本植物誌. (1965)p.1312. 至文堂. 東京.
- 21) 最新園芸大辞典編集委員会. 最新園芸大辞典. (1976)p.931. 誠文堂新光社. 東京.
- 22) 重岡廣男・大河内信夫・石田 明. 日本に自生するミヤマヨメナの分布と自生地による形態的差異. (2000)pp.89-99. 静岡大学教育学部研究報告. 第50号.
- 23) 田中美清. 佐渡志(佐渡双書巻2). (1958)佐渡双書刊行会.
- 24) 鷹取遜庵. (1805). 四季賞花集(上).
- 25) 高橋秀男・中川重年. 決定版生物大図鑑. 植物 I. 双子葉植物. (1984). 世界文化社. 東京.
- 26) 塚本洋太郎. 原色園芸植物図鑑(II). 宿根草編. (1964)p.29. 保育社. 大阪.
- 27) 塚本洋太郎監修. 原色花卉園芸大事典. (1984)pp.461-462. 養賢堂. 東京.
- 28) 鶴島久男. 趣味・営利花卉園芸ハンドブック. (1978)pp.429-431. 養賢堂. 東京.
- 29) 宇井縫藏. 紀州植物誌. (1929)p.15. 高橋南益社. 大阪.